

Χρυσή Λάκκοςについて：アルテミスと 水辺の女神たち

浜本，裕美
九州大学

<https://hdl.handle.net/2324/7171764>

出版情報：Philologica. 18, pp.1-19, 2023-07-30. フィロロギカ編集委員会（古典文献学研究会）
バージョン：
権利関係：



Χρυσηλάκατος について——アルテミスと水辺の女神たち

浜本裕美

Χρυσηλάκατος という形容詞はアルテミスなどの女神を形容する枕詞（エピテトン）^{*1}として用いられるが、文脈によって「黄金の矢の」あるいは「黄金の紡錘の」と²通りに解されている。アルテミスを形容する場合は「黄金の矢の」と理解し、その他の女神に冠せられる場合は「黄金の紡錘の」と解するのが通例である。しかしながら、*Od.* 4. 122 と *Bacchyl.* 11. 38 については、アルテミスを形容するにも拘らず、「黄金の紡錘の」という解釈が優勢である。こうした見解の相違を鑑みて、本稿は、*χρυσηλάκατος* の用例と先行研究を整理、検討する。加えて、その過程でもう 1 つの解釈の可能性を示唆したい。まず、従来の 2 つの解釈が成り立つ根拠を確認し、3 つ目の解釈の可能性を提示する（I）。続いて、ホメロス叙事詩・賛歌とヘーシオドスの例（II）、ピンダロスとバッキュリデースの例（III）、ソフォクレスの例（IV）の順に取り上げ、最後に議論のまとめを記す（V）^{*2}。

I χρυσηλάκατος の解釈

上記のように 2 つの意味に解しうることにについては、Due (6–9) が *ἡλακάτη* の原義を探ることで説明している。*ἡλακάτη* は「葦などの植物」を意味していたことが、ヘーシキオスや *Il.* の古註からわかる。さらに厳密には、*ἡλακάτη* は「葦などの茎の節から節までの部分」を指す（cf. Theophr. *Hist. pl.* 2. 2. 1）^{*3}。この原義が了解されれば、葦といった植物は

^{*1} 主に叙事詩で用いられるエピテトンは、国文学でいう「枕詞」と厳密には同一ではないが共通する点が少なくなく、西洋古典学関係の先行文献での使用例も複数あることから、本稿でもこの表現を用いる。

^{*2} 古典作品等の略記は基本的には *Oxford Classical Dictionary*, 4th edition に従い、記載がない場合は慣例に従う。

^{*3} *LSJ* s.v. II. 1 に該当する。Cf. also Phot. *Lexicon* s.v. *ἡλακάται: καλάμων ῥαβδία· ἀφ' ὧν καὶ τὰ κῶλα τῶν σταχύων*.

矢や紡錘を作るのによく使われる素材であることから、*ῥλακάτη* が「葦」に加えて、「矢」「紡錘」を指す語として用いられるようになったことも理解できる。Chantraine (s.v.) に加え、複数の注釈者もこの説を支持している (cf. n. 20)。但し、*ῥλακάτη* という語単体では、「紡錘」を指すことが多く、「矢」を指す例は確認されていない⁴。

留意点として、「紡錘」という語は、基本的に引き出した糸を撚り合わせるための spindle を指す⁵。しかしながら、*ῥλακάτη* が指すのは、以下で示す古註にもあるように梳いた羊毛を巻きつけ、そこから糸を引き出す distaff である⁶。5 世紀半ばの壺絵からは、片手で distaff を掲げ、下に垂らした spindle で糸を撚り合わせる様子が確認できる (*ARV* 795. 100, 1702; Beazley *Addenda* 290)⁷。下記で随時示すように、先行研究の中には *ῥλακάτη* を ‘shuttle’ や ‘spindle (Spindel)’ と訳す例があり、理解に混乱が見られる。中務訳「糸巻棒」(*Od.* 4. 122)・内田訳「糸巻き棒」(*Pind. Nem.* 5. 36) は「紡錘」よりイメージが明確であり、distaff の訳としてもよく用いられるようだが、「羊毛棒」といった訳語がより正確かもしれない⁸。

ヘーシュキオスと、この語に関連する古註を参照しておこう。

Hsch. χ 783 (H-C)

χρυσηλάκατος· καλλίτοξος· ῥλακάτη γὰρ ὁ τοξικὸς κάλαμος⁹

b (BCE³) T ex. ad *Il.* 16. 183 (Erbse)

χρυσηλακάτου· χρυσοῖς βέλεσι χρωμένης· τὸν κάλαμον γὰρ τῶν βελῶν τινες ῥλακάτην φασί.

いずれにおいても、*χρυσηλάκατος* は「黄金の矢を使う」と説明され、根拠として、*ῥλακάτη* は矢に使われる葦である、あるいは、矢に使われる葦は *ῥλακάτη* とも呼ばれているとされる。加えて古註 D の説明も参考になる。

⁴ Spindle を意味する *ἄτρακτος* には「矢」を (*Soph. Phil.* 290; *Trach.* 714)、*δόναξ* には「矢柄」を指す用例がある (*Il.* 11. 584)。また、テオフラストスは、ある種の葦 *κάλαμος* は「矢の葦 ὁ τοξικός」と呼ばれたと記す (*Theophr. Hist. pl.* 4. 11. 11)。付記すれば、葦を指すラテン語 *harundo* には「紡錘」の用例は確認できないものの、「矢柄」「矢」の用例はある (*Ov. Met.* 1. 471; *Verg. Aen.* 4. 73)。

⁵ 日本に distaff に相当する道具がないのは、製糸に羊毛を用いることが稀だからと考えられる。

⁶ Chantraine (s.v.) もこの点について注記している。Cf. e.g. *Eur. Or.* 1431–3: *ἀ δὲ λίνον <λίνον> ῥλακάται / δακτύλοις ἔλισσεν, / νῆμα δ' ἔτεο πέδωι*. Diggle (*OCT*) を用いる。但し *Pl. Resp.* 616c では、必然女神の持つ spindle の軸棒を指すと解される。

⁷ 糸紡ぎについては cf. e.g. Blümner 120–134.

⁸ 内田は「紡錘」(*Pind. Ol.* 6. 104)、「錘」(*Nem.* 6. 36; *fr.* 29. 1 (S-M)) という訳語も用いている。

⁹ Cf. also *Apoll. Soph. s.v. χρυσηλακάτου 'καλλιτόξου'*.

D ad *Il.* 16. 183 (van Thiel)^{*10}

χρυσηλάκατον: καλλιτόξον, ἢ χρυσῶι τῶι βέλει χρωμένης. ἡλακάτην γὰρ καλοῦσιν
καὶ τὸ βέλος καὶ τὸ γυναικείον ἐργαλείον, ἐξ οὗ τὸ νῆμα ἔλκουσιν^{*11}

D ad *Il.* 16. 183 は、*ἡλακάτη* について、矢のことも、女性が用いる道具でそこから糸を引き出すものも指すと 2 通りの意味を記す。これに続けて例証として *Od.* 4. 135 を引用している。

D ad *Il.* 6. 491 (van Thiel)

ἡλακάτην: τὸ τῶν γυναικῶν ἐργαλείον, ᾧ περιερίσσουνσι τὸ ἔριον. λέγει δέ ποτε
οὕτως καὶ τὸ βέλος ἐν τῶι συνθέντῳ ὀνόματι χρυσηλάκατος· σημαίνει γὰρ καὶ τὴν
χρυσᾷ βέλη ἔχουσιν Ἄρτεμιν.

D ad *Il.* 6. 491 は、*ἡλακάτη* が女性が糸紡ぎに使う道具であることを説明した上で、合成語 *χρυσηλάκατος* となった場合、矢を指すことがあると付記している。

ἡλακάτη についての最古の言及は、ミュケーナイ時代に遡る。クノッソスやピュロス出土のタブレットに ‘a-ra-ka-te-ja’ が確認されており、織物制作に関わることから *alakateiai* が「紡ぐ女性」‘distaff-women, spinning-women’を指すと理解される^{*12}。また、*ἡλακάτη* はそもそも *Arundo donax* (giant reed) を指した (Janko ad *Il.* 16. 183)。δόναξもこの植物を指す (*LSJ* s.v. δόναξ; 小川 180 n. 445)。水辺に育つ大型のイネ科植物ダンチクであり、葦のように茎は竹に似ることからヨシタケとの別名もある。この中空の茎は笛の材料となり、現在でも管楽器のリードを作るのに用いられる^{*13}。ダンチクは、日本で一般に「葦」と呼ばれる植物 (*Phragmites australis*, common reed) とよく似ているが、遥かに丈高く生育し茎の径も 1–2cm と大きく、杖にもなる頑丈な植物である。κάλαμος は、特定される場合を除き、葦 (ヨシ)・ダンチクの類の総称として用いられ、主にダンチクを指す。κάλαμος は、reed (英)、roseau (仏)、Rohr (独) と訳されており、日本でも「葦 (蘆)」と訳されることが多い。植物の指示という意味では正確さを欠くかもしれないが、本稿では *ἡλακάτη* が指示し

^{*10} Cf. also D ad 20. 70 (van Thiel) χρυσηλάκατος: ἐργατική . . . νῦν δὲ τῆς χρυσοῦν τόξον ἐχούσης, τοξευτικῆς. ἀπὸ τούτου δὲ καὶ ‘κελαδεινῆς’ ἀντὶ τοῦ κυνηγετικῆς. . . κραυγάζουσι γὰρ οἱ κυνηγοί. A ad loc. にも含まれる。

^{*11} A ad loc. にも含まれる。

^{*12} Chadwick-Baumbach 200; 参考文献も含めて cf. Aura Jorro s.v. a-ra-ka-te-ja. Solmsen (121) は、小アジアに由来する借用語である可能性を指摘するが、Chantraine と Beekes はこの見解に懐疑的である。Beekes は ‘probably just Pre-Greek’ とする。

^{*13} δόναξ, κάλαμος は笛あるいは笛の部分の指しうる (δόναξ の例: Aesch. *PV* 574; Pind. *Pyth.* 12. 25; Eur. *Or.* 146; Theoc. 20. 29; κάλαμος の例: Pind. *Ol.* 10. 84; *Nem.* 5. 38; *Pae.* 9. 36; Eur. *El.* 70; *IT* 1126)。

たであろう植物も *κάλαμος*, *δόναξ* の慣例的な訳語に倣って「葦」と呼ぶ^{*14}。

Due の指摘する *ήλακάτη* の理解を受けて、Stern は、*χρυσήλακος* は本質的に ‘golden “stalk”’ の意味を持つものの、早い段階で 2 つの意味（「黄金の矢」「黄金の紡錘・羊毛棒」）を獲得したと考える（277）。加えて、古註 bT によれば、アイスキュロスが川について *πολυήλακτους* を用いた例がある^{*15}。

b (BCE³) T ad 16. 183 (Erbse)

καὶ Αἰσχύλος ἐν Αἴτναις τοὺς ποταμοὺς “πολυήλακτους” φησί.

Maehler (1982, ad 11. 38) も指摘するように、この例は「葦」という意味が古典期に知られていた証左となる。

以上で確認したように、Due は、この形容詞が「黄金の矢の」「黄金の紡錘・羊毛棒の」という 2 つの意味で解しうる背景を説明し、*ήλακάτη* が「葦」「矢」「紡錘・羊毛棒」の 3 つの意味を持ちえたと纏める（9）。この議論を受けて、本稿は *χρυσήλακος* が「黄金の葦の」という意味を持つ可能性を提起したい^{*16}。特に第 3 節（III）で検討する合唱抒情詩の例において、「黄金の葦の」という解釈は十分に検討の余地があると思われる。

II ホメーロス叙事詩・賛歌とヘーシオドスの例

χρυσήλακος は、*Il.* と *Od.* 及びホメーロス賛歌ではアルテミスのみに使われる^{*17}。*Od.* の例は 4. 122 のみだが、*Il.* には 2 例あり（16. 183; 20. 70）、いずれも詩人の語りである。叙事詩の枕詞（エピテトン）には、詩人が使用した時点で既に語義が不明瞭になっていたと考えられる例があり、また、必ずしも文脈に適さないように思われる形容詞が主に韻律上の都合で用いられる場合もある。ここでは、文脈上どの意義が最も抵抗なく受け取られえたかという作品受容の観点から検討を進めたい。先行研究を整理しながら、主に「黄金の紡錘・羊毛棒の」という理解の是非について検討する。

^{*14} *κάλαμος* やダンチュクについての説明は、主に小川 172–83 (Theophr. *Hist. pl.* 4. 11 への訳注) に基づく。小川は、聖書で言及される「葦」もダンチュクと同定されていることにも触れ、「葦」という慣例的な訳語では頑丈なダンチュクのイメージが十分に伝わらないという懸念を記している（172–3）。Cf. also LSJ s.v. *κάλαμος*.

^{*15} Aesch. *fr.* 8. 1R に当たる。Cf. Hsch. η 309 (Latte) *ήλακάτη*: *δόναξ. ὁμοίως καὶ πολυήλακατα τὰ τῶν ποταμῶν χεῖλη* (Aesch. *frg.* 8).

^{*16} 「黄金の矢の」については、葦から作られたことを捨象せず「黄金の葦矢の」と受け取られていた可能性も考えられるが、検証の手立てがないため、可能性を示唆するに留めたい。

^{*17} Clader は、*Il.* と *Od.* においてこの枕詞がアルテミスに使われるのは、*Od.* 4. 122 のみであると述べ、*Il.* の 2 つの例を見逃しているようである（60）。

Il. 20. 70 は神々がギリシア側とトロイアー側に分かれて相対する場面で、アルテミスがヘーレーに立ち向かうさまが描かれている。

Ἥρηι δ' ἀντέστη χρυσηλάκατος κελαδευή

Ἄρτεμις ἰοχέαιρα, κασιγνήτη Ἑκάτοιο·

(*Il.* 20. 70–1)^{*18}

ヘーレーに立ち向かうアルテミスは、同じく弓を扱うアポローンの姉妹として表象され、黄金の矢を携え、激しく射かける矢音を響かせる射手と解するのが適切であるように思われる。

Il. 16. 183 ではヘルメースが女性を見初めた機会がアルテミスのコロスであったと述べられる。

τῆς δ' ἐτέρης Εὐδωρος ἀρήϊος ἡγεμόνευεν,

παρθένιος, τὸν ἔτικτε χορῶι καλῇ Πολυμήλῃ

Φύλαντος θυγάτηρ· τῆς δὲ κρατὺς Ἀργειφόντης

ἡράσατ' ὀφθαλμοῖσιν ἰδὼν μετὰ μελπομένησιν

ἐν χορῶι Ἀρτέμιδος χρυσηλακάτου κελαδευῆς·

(*Il.* 16. 179–83)

ここでは、実際にアルテミスが加わっている歌舞のことを指しているのか、アルテミスの祭りを指すのか曖昧にされているものの、アルテミスが若い女性の加わる歌舞に深い関わりを持つことが示されている^{*19}。*Il.* の 2 例では χρυσηλάκατος κελαδευή という組み合わせで用いられ、3 脚後半以降の詩行を占める定型句となっている。

上述のように、Due の議論に基づき、Brügger や Janko は、ἡλακάτη が通常「紡錘・羊毛棒」を意味することを認めつつ、糸紡ぎという家に属する女性が行う営みはアルテミスという女神に相応しくないため、*Il.* でアルテミスに用いられる χρυσηλάκατος は、ヘーシュキオスや古註にあるように「黄金の矢の」と解するのが適切であると説明する。LfgrE、Leaf、Willcock、Chantraine もこの理解を支持する^{*20}。

この広く受け入れられている見解に対し、Leeuwen に加え、LSJ や Beekes 及び Frisk は見解を異にする^{*21}。Meier もまた、どの用例も 'mit goldener Spindel' との理解を排除しないと

^{*18} ホメーロスの引用は M. L. West (1998–2000) 及び (2017) を用いる。

^{*19} アルテミスに捧げられるコロス儀礼については、Calame 174–90 参照。

^{*20} Due 4, 6; Brügger ad 183; Janko ad *Il.* 16. 183; Leaf ad *Il.* 16. 183; Willcock (1984) ad 16. 183; 呉訳「黄金の矢を射て」; 松平訳「黄金の矢を」。Janko も distaff ではなく 'spindle' を意味すると記す。Cf. Faulkner ad *h.Hom.* 5, 16; Olson ad *h.Hom.* 5, 16–17.

^{*21} Leeuwen ad 16. 183; LSJ s.v. 'with distaff of gold, not (as Sch.) with arrow of gold' (但し、s.v. ἡλακάτη II 2 には 'in

の見解を示す。その根拠として、ヘーシュキオスは後代の理解に過ぎないことを指摘し、アルテミスの権能は多岐にわたり、併せて用いられることの多い形容詞 *κελαδευή* が女性の領域であるコロス祭儀の状況によく適うと見做しうることから、*χρυσηλάκατος* もまた狩猟の女神という側面に限定されないと主張する (Meier 28–9, esp. n. 2)。Wickert-Micknat も同様の見解を示す (29)^{*22}。

確かに、アルテミスに纏わるコロス祭儀は女性の領域と見做しうるが、女性の領域にはさまざまなものがあり、端的に一括りにできるものではない。例えば、若い未婚女性はしばしば飼ひ慣らされていない若駒 *πῶλος* として表象される (e.g. Anac. 417. 1 (*PMG*); Eur. *Hec.* 142; *Hipp.* 546)。また、カッリストーといった神話上の女性は、婚姻を拒否し、野山を駆け巡るアルテミスの率いる若い女性の集団に加わるが、コロス儀礼を司るアルテミスが率いる若い女性の集団は歌い舞うコロスに類比的である。このように女性は野生の領域に属すとみなされることがあり、コロス祭儀に参与する女性像は、糸紡ぎに象徴される女性像とは必ずしも相容れない^{*23}。

「黄金の紡錘・羊毛棒の」あるいは「黄金の矢の」という2つの解釈のいずれを優先するかは、女性の生に関わるアルテミスの多岐にわたる権能において、糸紡ぎの道具と弓矢のどちらがアルテミスという神格により適うものであるかというアルテミス理解に関わっている。さらに「黄金の矢の」という理解には、狩猟の女神という側面だけでなく、女性を突然襲う死はアルテミスがもたらすものであるという理解も関係するだろう (e.g. *Od.* 11. 172–3)。アルテミスは出産を加護する女神でもあり、出産や死は自然的・野生的領域に関わる。婚姻につながる機会となるコロス儀礼との密接な関わりは、未婚女性の既婚女性への通過儀礼を司る女神であることから理解される。コロス儀礼・出産・死は、女性の生における段階の移行に関わる出来事だと言えよう。したがって、コロス儀礼が女性の領域であることは、女性の文化的営みである糸紡ぎの道具をアルテミスの持ち物とするのに十分に説得的な根拠とは見なし難い^{*24}。アルテミスは、野生の領域に関わる女神として、未だ結婚の頸

Compds. (e.g. *χρυσηλάκατος*), arrow, Hsch.’との記述がある) ; Beekes s.v. *ήλακάτη* ‘with golden distaff’; Frisk s.v. *ήλακάτη* ‘mit goldener Spindel’.

^{*22} Wickert-Micknat (29) は、アテーナイにおける女性の通過儀礼がアテーナー女神の衣を織ることに関連する点を「黄金の紡錘の」と解す理由として挙げるが、工芸の神であるアテーナーに関わる通過儀礼に織物が関連することは、同じく通過儀礼を司るとはいえアルテミスを糸紡ぎと結びつける根拠とはなり得ない。

^{*23} Cf. 例えばカッリストーについて *Ov. Met.* 2. 411 ‘non erat huius opus lanam mollire trahendo’.

^{*24} アルテミスについて cf. *RE* s.v. Artemis; Burkert 149–52; Vernant esp. 198–202, 217–9. アルテミスと糸紡ぎが関連づけられる箇所として *Hdt.* 4. 34 参照 (αἱ μὲν πρὸ γάμου πλόκαμον ἀποταμόμεναι καὶ περὶ ἄτρακτον εἰλίσσασαι ἐπὶ τὸ σῆμα τιθεῖσι (τὸ δὲ σῆμά ἐστι ἔσω ἐς τὸ Ἀρτεμίσιον ἐσιόντι ἀριστερῆς χειρός, ἐπιπέφυκε δὲ οἱ ἐλαίη)). デーロス島のアルテミスの社内にヒュペルボレアイの2人の娘の墓があり、その墓に婚姻前の娘が、髪を一房切り取って紡錘 spindle に絡ませて供える、という習慣を伝える。この風習は、アルテミス

城に繋がれていない未婚女性を庇護し、さらに未婚女性がそこから脱していくための通過儀礼をも司るのである。

Od. 4 は、テーレマコスのスバルタ訪問を題材とする。テーレマコスとメネラーオスが言葉を交わす場面に続いてヘレネーが登場し、その様子が女神アルテミスに喩えられる。

ἐκ δ' Ἑλένη θαλάμοιο θυώδεος ὑψορόφοιο
ἦλυθεν, Ἀρτέμιδι χρυσηλακάτῳ εἰκνῖα. (*Od.* 4. 121-2)

ここでの χρυσηλάκατος は、例外的に「黄金の紡錘・羊毛棒のアルテミス」と解す見解が優勢である^{*25}。続く 131 でヘレネーの侍女が運んでくる黄金の羊毛棒に言及があるからである (χρυσέην τ' ἡλακάτην)。この箇所についての考察は別稿に譲る。

次に「アルテミス賛歌」(*b.Hom.* 27. 1) と「アフロディーテ賛歌」(*b.Hom.* 5. 16, 118) の例を参照しよう^{*26}。*Il.* の 2 例と同様に、3 脚後半以降の詩行を占める χρυσηλάκατος κελαδεινή という組み合わせで用いられる。「アルテミス賛歌」では、女神を称える冒頭の 1 行目に使われる。

Ἄρτεμιν αἰίδω χρυσηλάκατον κελαδεινήν
παρθένον αἰδοίην ἐλαφιβόλον ἰοχέαιραν
αὐτοκασιγνήτην χρυσαόρου Ἀπόλλωνος (*b.Hom.* 27. 1-3)

Il. 20. 70-1 と同様に、ἰοχέαιραν という形容詞とアポローンへの言及は、弓矢がアルテミスの特徴であることを印象付ける。続く 5-6 においても黄金の弓を引き、矢を射かける様が謳われる (παγχρύσεια τόξα τιταίνει / πέμπουσα στονόεντα βέλη)。

「アフロディーテ賛歌」*b.Hom.* 5. 117-8 には、*Il.* 16. 183 の影響が濃厚に窺える。アフロディーテが、アンキーセースに自分は人間であると偽って作り話を聞かせる件である。

νῦν δέ μ' ἀνήρπαξε χρυσόρραπις Ἀργειφόντης
ἐκ χοροῦ Ἀρτέμιδος χρυσηλακάτου κελαδεινῆς. (*b.Hom.* 5. 117-8)

b.Hom. 5. 118 は、冒頭の前置詞を除いて *Il.* 16. 183 とほぼ同一であり、ヘルメースに攫われ

が女性の成長を司る神であることから理解できるだろう。

^{*25} S. West ad loc.; Janko ad *Il.* 16. 183; 中務訳「黄金の糸巻棒を持つ」(「矢を指すとの解釈あり」との注記がある)。それに対し Stanford ad loc. は弓矢への言及と解し 'with golden shaft' と説明する。呉訳「黄金の矢を携える」と松平訳「黄金の矢持つ」も後者の説を取る。Due (4-5, 9) は、詩人が 2 つの意味について言葉遊びを行なっているか、少なくともこの枕詞の語源に意識的であると指摘する。

^{*26} Cf. Due 6.

たというエピソードも重なっている。*h.Hom.* 5 の冒頭部分では、ゼウスをも屈服させる強力なこの女神もアテーネー、アルテミス、ヘスティアーの三柱の女神には支配を及ぼすことはできないとされ、アフロディーテと対比される形でアルテミスの特徴が謳われた。

οὐδέ ποτ' Ἀρτέμιδα χρυσηλάκατον κελαδαινὴν
 δάμναται ἐν φιλότῃ φιλομμειδῆς Ἀφροδίτῃ·
 καὶ γὰρ τῇ ἄδε τόξα καὶ οὔρεσι θήρας ἐναίρειν,
 φόρμιγγές τε χοροὶ τε διαπρύσιοί τ' ὀλολυγαί
 ἄλσεά τε σκιδόεντα δικαίων τε πτόλις ἀνδρῶν. (h.Hom. 5. 16–20)

アルテミスに特徴的な営みとして一番に言及されるのは、弓矢で山の獣を殺すことであり、ここでも「黄金の矢の」という意味が相応しいだろう^{*27}。アルテミスの領域は、豎琴と歌舞と女性の叫び声、陰なす木立と正義にかなう男たちのポリスであると謳われる。

アフロディーテとアルテミスの対比は、アフロディーテの作り話の前提として機能しているように思われる。アルテミスのコロスは、アフロディーテとは相容れない。その一方で *Il.* 16. 183 の例が示すように、そこから攫われる先にはアフロディーテの領域がある。このことは、上述したようにアルテミスが通過儀礼を司る神であることから理解できる。また *Il.* 16. 183 の例と同様に、女神アルテミスの率いるコロスなのか、アルテミスを称える人間のコロスなのか決めがたいことは、女神でありながら人間を装うアフロディーテの姿を仄めかすものとなっている。

最後に、*Hes. fr.* 23 (a) 18 (M-W) では、現存部分に読み取れる *κελαδαινῆς* からアルテミスの名とこの形容詞を補うことが提唱されている (cf. Meier 28)。

Hes. fr. 23 (a) 18 (M-W)

βωμῶ[ι ἔπ' Ἀρτέμιδος χρυσηλακ]ᾶτ[ου] κελαδαινῆς

本節で確認したように、*χρυσηλάκατος* は、ホメーロス叙事詩・賛歌において、*Od.* 4. 122 を例外として、*χρυσηλάκατος κελαδαινῆς* という 3 脚後半以降の詩行を占める定型表現として、格を変えながらアルテミスを形容するのに繰り返し使われており、この定型表現に基づいて、ヘーシオドスの断片に補いとして受け入れられている。文脈やアルテミスの権能からは「黄金の紡錘・羊毛棒の」という解釈は説得力に欠ける。*Od.* 4. 122 以外の例では、多数の研究者の見解と同様に「黄金の矢の」という理解が相応しいと考えられる。

^{*27} Cf. Faulkner ad loc.; Olson ad loc.

III ピンダロスとバッキュリデースの例

続いて、ピンダロスとバッキュリデースを取り上げる。Bacchyl. 11. 38を除き、アルテミス以外の女神に冠せられる。まず、ピンダロスにおいて、アンフィトリテーやネーレイデス、メリアーに冠せられる。パウサニアースによれば、メリアーはテーバイのイスメーノスの母である (Paus. 9. 10. 5-6)。

Pind. *Ol.* 6. 104-5

χρυσалаκάτοιο πόσις Ἀμφιτρίτας

Pind. *Nem.* 5. 36-7

ποντίαν χρυσалаκάτων τινὰ Νηρεΐδων

Pind. *fr.* 29. 1 (S-M)

Ἴσμηνὸν ἢ χρυσалаκάτον Μελίαν^{*28}

冒頭でも述べたように、この枕詞 χρυσηλάκατος は、アルテミスの枕詞として用いられた場合、「黄金の矢の」という意味として理解されることが殆どだが、アルテミス以外に使われる場合、これらの女神は矢に関わりがないため、この語の後半部分をなす ἡλακάτη から「黄金の紡錘の」と理解されることが多い。しかしながら、Maehler も指摘するように、これらの女神は糸紡ぎの道具にも特段関わりはなく、前半の「黄金」の部分に主たる眼目があり、装飾的な語として用いられたのかもしれない (ad 11. 38)。ピンダロスにおいて「黄金」は不壊なる神々の世界を象徴するものである^{*29}。Due (9 n. 28) が同様の見解を示すのに加え、Gerber も以下に引用する *Nem.* 6. 36 への注釈において Maehler の見解を支持している (68)。

他方、Due を始めとする研究者たちのように、もともと水辺の植物である葦を指す言葉が、葦を素材とする矢や紡錘を指すようになったとの理解に立てば、「黄金の葦の」という解釈は考慮に値する。この形容詞が用いられるアンフィトリテーやネーレイデス、テーバイのイスメーノスの母メリアーは、水に関わりが深い女神だからである。海の神も崇拜は岸辺で行われる^{*30}。葦類は、周知のように沼地や潟、川岸、海岸といった水辺に育

^{*28} Snell & Maehler (1987), Maehler (1989) を用いる。

^{*29} Willcock (1995) 18.

^{*30} *Il.* 18. 41 ではネーレイデスの 1 人の名は Λιμνώρεα とされ、海と潟の連続性が伺える。この名は *Hes. Th.* 240-64 のカタログには入っていない。

つ^{*31}。塩分に耐性を持つイネ科の植物であり、季節によっては黄色く変色することもあるだろう。第 1 節 (I) で触れたように、古註 bT によれば、アイスキュロスが川について *πολυηλακάτους* を用いた例がある (cf. n. 15)。*ἡλακάτη* を含む合成語が水辺を連想させることから、水に関わりの深い女神たちを冠する枕詞として用いられた可能性は十分考慮に値すると思われる。

ピンダロスには、その他、母神レートーに用いられる 2 例がある。

Pind. *Nem.* 6. 36–8

*χρυσалаκάτου ποτὲ Καλλίας ἀδών / ἔρνεσι Λατοῦς, παρὰ Κασταλίαν τε Χαρίτων /
ἐσπέριος ὁμάδῳ φλέγεν*^{*}

Pind. *fr.* 128c (S-M)

Ἔντι μὲν χρυσалаκάτου τεκέων Λατοῦς αἰοδαί

古註に従えば、アルテミスからレートーに転用されたと説明されうる^{*32}。Gerber も *Nem.* 6 への注釈でこの見解をとる (68)。2 例のいずれにおいても、レートーはアルテミスとアポローン之母として言及されている。Pind. *fr.* 128c は哀悼歌に分類される。また、祝勝歌においてその地の川や泉に言及することは珍しくないが、Pind. *Nem.* 6. 36–8 では、カスターアの泉とカリテスへの言及が続くことを指摘しておく。

続いて、バッキュリデースには 2 例あり、9. 1 はカリテス、11. 38 はアルテミスを形容する。

Bacchyl. 9. 1–3

*Δόξαν ὦ χρυσалаκάτοι Χάρι[τ]ες, / πεισίμβροτον δοίητ', ἐπεὶ / Μουσᾶν γε ἰοβλεφάρων
θεῖος προφ[άτ]ας*^{*33}

カリテスは、詩神ムーサイと共に呼び掛けられており、両者は泉や川の流れに深い関わりを持つ^{*34}。Hes. *Th.* 5–6 では、ムーサイが歌い舞う前に身を清める水場として、ヒッポクレネーに加え、ペルメーッソスやオルメイオスの流れが謳われる。山頂近くの泉や小川は、沼地や岸辺に比べると葦が生い茂ることは少ないかもしれない。しかしながら、ムー

^{*31} Cf. e.g. *Od.* 14. 474 'ἀν δόνακας καὶ ἔλος'; Thgn. 1. 785, Eur. *IA* 178–9 'Εὐρώτα δονακοτρόφου'. Cf. n. 48.

^{*32} ad Pind. *Nem.* 6. 59c (Drachmann) χρυσηλάκατον δὲ εἶπε τὴν Λητὴν τὸ τῆς Ἀρτέμιδος μετενεγκῶν ἐγκώμιον ἐπὶ τὴν μητέρα τὴν γεννήσασαν.

^{*33} Machler (2003) のテキストを使用する (引用箇所に関しては (1982) と同一である)。

^{*34} Cf. e.g. Larson 138.

サイと水の関わりは特定の泉や小川に限られるものではなく、詩歌や音楽は水の流れる様子と比喩的な親縁性を持つ。例えば、時代は下るがカッリマコス³⁵は、忌避すべき長大な叙事詩をアッシリアの大河（ユーフラテース川）に準える一方で、自分の詩作を清らかな泉からの湧水に喩えた（Callim. *Hym.* 2. 108–12）。また、先に触れたように、葦は笛の材料であり、その点でもムーサイに関わりを持つ。

加えて、もしこの枕詞が川辺を想起させるとすれば、Bacchyl. 9 に特有の意味を読み取りうる。この作品はネメア競技祭に勝利したプレイウス市の競技選手を称えるものであり、プレイウスのほとりを流れるアーソーポス川とその娘たちの神話が謳われる（39–65）。アーソーポス川はテーバイをはじめとする各地の源として呼び掛けられており、勝者とその出身都市を称える祝勝の中心的部分をなす。この神話は全 104 行の作品中約 4 分の 1 を占める。この祝勝歌は、各地を流れる川に都市の栄光を重ねており、その歌の源であるムーサイとカリテスに川辺を想起させる枕詞を冠することは、意味連関とイメージの喚起という点で極めて有効だと思われる。この議論の詳細は別の機会を期したい。

Bacchyl. 11. 38 の例は、アルテミスを形容するが、「黄金の紡錘の」という理解が近年の解釈者の間では優勢である。

Bacchyl. 11. 37–9

νῦν δ' Ἄρτεμις ἀγροτέρα / χρυσηλάκατος λιπαράν / [Ἡμ]έρα τοξόκλυτος νίκαν ἔδωκε.

ヘーシュキオスの説や τοξόκλυτος との関連から「黄金の（弓）矢の」と解す研究者として Jebb や Smyth がいる一方³⁵、先にも触れたように Maehler（1982, ad 37–9）は、この形容詞が用いられるアルテミス以外の女神は矢にも糸紡ぎの道具にも関係がないことを理由に、女性に典型的に用いられる枕詞として装飾的に用いられたと考える³⁶。Cairns（2010, ad loc.）もまた両方の可能性を指摘しつつ、Maehler の見解を受け入れる³⁷。Maehler（1982）では ‘Spindel’ と訳されているが、Maehler（2004）では、糸紡ぎに使う「紡錘・羊毛棒」ではなく織物の横糸を走らせる道具である「杼 shuttle」（‘of the golden shuttle’）と訳されており混乱が見られることを付記しておく³⁸。

³⁵ Smyth 420 (‘of the golden bow’ not ‘of the golden distaff’); Jebb 63, 325 (‘with golden shaft’).

³⁶ 付記すれば、当該箇所の Maehler（2004）のテキスト（*χρυσηλάκατος*）はミスプリントであろう。Maehler（2004）では、*ηλακάτη* が「葦」から派生し「矢」の意味を持つという説明自体を否定しているようにも読み取れるが、Maehler（1982）を見る限り、その意図はないと思われる。

³⁷ Cf. 丹下訳「黄金の紡錘もつ狩人アルテミス、弓で名高いヘメラ」。

³⁸ Easterling も、アルテミスの枕詞としては ‘of the golden arrow’ と理解する一方、字義通りには ‘of the golden shuttle’ (ad Soph. *Trach.* 637) と説明しており、distaff と shuttle が混同されているのかもしれない。

この議論に関連するのが、アルテミスに冠せられた4つの形容詞(*ἀγροτέρα χρυσαλάκατος* [Ἡμέρα τοξόκλυτος])の対応関係の理解である。*ἀγροτέρα*と*Ἡμέρα*は、儀礼名としても用いられる(Maehler ad loc.; Cairns ad loc.; Nilsson 484)。Sternが*τοξόκλυτος*と*Ἡμέρα*について前者が狩猟、後者が飼慣らすことを意味する点で対立していると論じ(275-6; also Segal 267)、Maehlerは4つの形容詞は交差配列をなすと指摘する(ad loc.)。これらを受けて、Cairnsは4つの形容詞の関係を‘wild-tame-tame-wild’と表現した(2010, ad loc., cf. 123-4)。その上でMaehlerとCairnsは、*Ἡμέρα*という添え名は糸紡ぎにより適合するとして、*χρυσάλακος*は「黄金の紡錘・羊毛棒の」と解す方が望ましいとする(cf. also Cairns (2005) 44)。*Ἡμέρα*の添え名は、上述したようにアルテミスが通過儀礼を司る神であることに通じる^{*39}。このことを考え合わせると、4つの枕詞に野生の領域とその領域からの文明化という両義性を読み取ることは首肯できるものの、文明化の過程を文明的営み自体を象徴する糸紡ぎの道具と同一視できるのか、また、前節の検討に基づき、ホメロス詩においてこの枕詞を「黄金の紡錘の」ではなく「黄金の矢の」と解すならば、アルテミスの枕詞としてよく知られたこの語を、弓への言及が続くにも拘らず、糸紡ぎのみに言及していると解することが妥当なのかといった疑問が残る^{*40}。

これに対しSternは、先にも触れたように*χρυσάλακος*は‘golden “stalk”」の意味を持つが、早い段階で2つの意味を獲得したと考え、パッキュリデースは、文明的な女性の営みを象徴する「紡錘・羊毛棒」と狩猟の女神が携える「矢」という対照的な2つの意味を含み持つ語として、この形容詞を用いたと解す(277)。Seafordもこの枕詞の両義性が意図されている可能性を示唆する(120, n. 12)。*ἀγροτέρα*と*Ἡμέρα*の示す両義性が、この一語の中にも託されているとの解釈である。両義性を含み持つと解すことは文明への移行を示唆するとも考えられる。Bacchyl. 11は、SternやSegalが夙に指摘するように野生と文明の対置が重要な作品であり、こうした意識的な語の選択は十分にありうるだろう。

さらに興味深いことに、Bacchyl. 11は、2つの川に挟まれたメタポンティオン市の競技勝者を称える歌である。この市はイタリア半島南端に位置する。この祝勝歌では、アルカディアを舞台とするプロイトスの娘たちの狂気と救済の神話が語られる^{*41}。娘たちを救ったのもこの祝勝歌が寿ぐ勝利を授けたのもアルテミスである。アルテミスの救済は娘たちの婚姻に結びついており、先に見た*Ἡμέρα*の添え名や通過儀礼を司る神であることに通じてい

^{*39} Cf. Burnett 108-13.

^{*40} パッキュリデースには意識的なホメロス詩の利用が確認できる。パッキュリデースに特徴的な複合形容詞の使用におけるホメロスとの関係についてCairns (2010) 38-41 参照。

^{*41} この祝勝歌で言及される神話とパッキュリデースの独自性については、先行研究も含めてCairns (2010) 107-9 参照。

る。娘たちに狂気を送り館から山へと追いやったのは婚姻の神ヘーラーであった(43-56)。だが、アルテミスがルーソス川のほとりで(Λούσον ποτὶ καλλιρόαν, 96) 娘たちを救ったことで、その地に神域が設えられコロス儀礼が始められる(95-112)。その後アルテミスは、メタポンティオン市に居を移して市の西方を流れるカサスの流れのもとに(Κάσαν παρ' εὐνδρον, 119) 杜を得た(113-9)^{*42}。アルテミスは、ルーソイ地方でもメタポンティオン市郊外でも、Ἡμέραの儀礼名を持ち、川に結びつけられる^{*43}。上述のようにBacchyl. 11. 38の例は解釈が分かれるものの、この祝勝歌の舞台となる市において、アルテミスと川の結びつきが重要であることも、この枕詞の選択に何らかの影響を与えているかもしれない。

アルテミスが川に結び付けられる例は他にもあり、例えばエーリス地方ではἈλφειαίαとアルフェイオス川に関連する添え名で呼ばれる(Paus. 6. 22. 5)^{*44}。アルカディア地方でアルフェイオス川に流れ込むラードーン川の岸边は、葦笛が生まれた地とされる。オウィディウスによれば、アルテミスに付き従うニンフだったラードーン川の娘シューリンクスは、パーンに追われた末に岸边で葦に姿を変え葦笛とされた(Ov. Met. 1. 689-712; cf. Corinn. 31 (PMG) 'Λάδοντος δονακοτρόφω')^{*45}。オウィディウス以前の言及は失われたらしく確認できず、作品固有の要請も考慮すべきではあるが、儀礼を背景とした神話的風景において、アルテミス・川・葦が結びつきうることが窺える。

これまで見てきたように、χρυσηλάκατος / χρυσαλάκατος は、ホメーロス叙事詩・賛歌では専らアルテミスに冠せられたが、ピンダロスとバッキュリデースは他の女神たちにもこの枕詞を使用する。本稿は、アルテミスからの転用と解しうるレートーを除いて、この枕詞が水と関わりの深い女神たちに用いられていることを指摘し、「黄金の葦の」という解釈を提案した。この考察に基づき、アルテミスに使われる例(Bacchyl. 11. 38)においても、アルテミスと川の結びつきがこの枕詞の選択に影響した可能性を示唆した。

IV ソフォクレスの例

上述の例以外に、この枕詞が確認できるのはSoph. Trach. 637である。

Soph. Trach. 635-7

οἱ τε μέσσαν / Μηλίδα παρ λίκμαν / χρυσαλακάτου τ' ἀκτὰν κόρας,

^{*42} カサス流域の神域の設置に言及する箇所では'ὦ χρυσέα δέσποινα λαῶν' (116-7) と呼びかけられる。

^{*43} IG 5 (2) 398 (一部補い), 403 (Lusi); Paus. 8. 18. 8; Callim. Hym. 3. 236; cf. Maehler (1982) 195; (2004) 133; Cairns (2005) 37. 考古学的知見について Cairns (2005) 37 参照。

^{*44} Nilsson 492; Farnell 428 and 558-9 n. 4; Roscher 560.

^{*45} この挿話についての情報は cf. Bömer ad loc.

この例では、この形容詞が使われることに加え、古註の説明やマーリス湾の潟への言及からアルテミスに言及していると推察される^{*46}。アルテミスは、川だけでなく、以下で具体的に確認するように、頻繁に沼地や潟に結びつけられる神格だからである^{*47}。

この箇所は、第二スタシモンの第一スタンザにおいて、コロスがトラークスの住民たちに呼びかける部分であり、彼らがその側に住まうマーリス湾の潟は、乙女神の岸边（ἀκτὰν κόρας）と言い換えられる。古註は以下のように、エウボイア島で「黄金の矢を持つアルテミス」が崇拝されていたと伝える。

ad Soph. *Trach.* 637 (Papageorgius)

χρυσалаκάτου] ἐν Εὐβοίᾳ τιμᾶται χρυσότοξος Ἄρτεμις.

この劇の舞台トラークスはエウボイア島の対岸にあり、マーリス湾の西側にトラークスが位置するのに対し、湾の東側にはエウボイア島の西北端部が入り込む形となっている。エウボイアとトラークスはいずれも *Il.* 2 に言及がある（535ff., 682）。そこでは、Τρηχίς はアキッレウスが従える兵たちの出身地の一つとして言及され、古典期に確認されるトラークスに大きく違わないと考えられる（Kirk ad loc.）。

当該の枕詞は使われないものの、Eur. *Hipp.* においてもアルテミスは潟に関連づけられる^{*48}。本劇の舞台はトロイゼーンである。パロドスにおいて、コロスは衰弱するパイドラーの身を案じてその原因を推し量ろうとする。そこで言及されるアルテミスは、狩の女神ディクテュンナとして言及された後（τὰν πολὺθη-/ρον Δίκτυνναν, 145-6）、メタナ湾近くにある大きな塩水の湾リムネー（サローンの潟）を通り、リムネーとメタナ湾の間に伸びる砂州を超え、海の渦潮を渡る神として描き出される（διὰ Λί-/μνας χέρσον θ' ὕπερ πελάγους δίναις ἐν νοτιάις ἄλμας. 148-50）。さらに続く場面において、パイドラーはアルテミスに向かって‘δέσποιν’ ἁλίας Ἄρτεμι Λίμνας’（228）と呼びかける。

このリムネーの辺りにはアルテミスの神域があった。パウサニアスは、トロイゼーンの王サローンが、潟のところにアルテミス・サローニスのための聖所を造営したと伝えており、そこには杜もあったらしい（οὗτος τῇ Σαρωνίδι τὸ ἱερόν Ἀρτέμιδι ὠκοδόμησεν ἐπὶ θαλάσῃ τελματώδει καὶ ἐπιπολῆς μᾶλλον... τὸ ἄλσος τῆς Ἀρτέμιδος, Paus. 2. 30. 7）。この箇所では、サローンが狩りの最中に海の中にまで牝鹿を追いかけた結果命を落とし、その遺

^{*46} Davies ad loc.; Easterling ad loc. Stern (277 n. 10) は、Soph. *Trach.* 637 についても、ケンタウロスを射た矢（681）とヘーラクレスに死をもたらす衣の両方に言及したものととして両義性を指摘する。

^{*47} Farnell 427 and 558 nn. 1-2; Fränkel 29-30; Nilsson 490 and 493; Roscher 560.

^{*48} Barrett ad 148-50; 川島 281 n. 5. 川島によれば、現在トロイゼーンのリムネーには葦の類が繁る。

体がアルテミスの柱に打ち上げられて神域内に埋葬されたため、リムネーがサローンの潟と呼ばれるようになったという名称の由来が紹介されている。Barrett の復元図は神域の位置をリムネーの南に記すが（‘temple of Artemis Saronia’ 383）、近年の復元図では、リムネーの西北、海岸近くに想定している（Stupperich & Stupperich ‘sanctuary of Artemis Saroneia(?)’ 34）。遺体が打ち上げられたという逸話からは、リムネー自体からは砂州によって隔たれるものの、海岸に近い立地がより相応しいように思われる。

またコリントスの北西に位置するシキュオンにも、アルテミス・リムナイアの神殿がある（ἔστι ναὸς Ἀρτέμιδος … Λιμναίας. Paus. 2.7.6）。先に触れた Bacchyl. 9 が祝したプレイウスのほとりを流れるアーソーポス川は、シキュオンを通過してコリントス湾に注ぐ。その他、アルテミスが Λιμναία や Λιμνᾶτις の添え名とともに崇拝されていた場所として、海岸沿いのパトライ（Paus. 7.20.7）、エピダウロス・リメーラ（Paus. 3.23.10）だけでなく、アルカディアのテゲアー（Paus. 8.53.11）やスパルター（Paus. 3.23.10; Strabo 8.4.9）などが挙げられる^{*49}。Λιμνᾶτις のみで名指される例もある（IG 5 (I) 1375-77, 1442, 1470）。また、メッセーナやアルカディアでは、沼地のアルテミス（τὸ τῆς Ἑλείας Ἀρτέμιδος ἱερόν, Strabo 8.3.25）とも呼ばれた^{*50}。

さらによく知られた例は、ラコーニアとメッセーナを隔てるタユゲトス山脈の西側、リムナイと呼ばれた場所（Volimos）に位置したアルテミスの神域であり、リムナイオンと呼ばれていた（Paus. 3.2.6; 3.16.7; Strabo 8.4.9）^{*51}。タユゲトス山脈は、ナウシカアーをアルテミスに喩える比喻（Od. 6.102-8）において、女神の居場所の一つとして言及される。その神域からも Λιμνᾶτις と読み取れる出土品が複数確認されている。また出土品から、その神域では、紀元前8世紀からヘレニズム期に至るまで儀礼が続いていたことがわかる^{*52}。

前節（III）で見たように、この枕詞が水に関わる女神たちに用いられることから「黄金の葦の」という解釈が考慮に値するならば、本節で確認したようにアルテミスが沼地や潟に関わりの深い神格であることが、この枕詞と女神の結びつきの背景にある可能性も否定しきれない。沼地や潟、川といった水辺との関わりからアルテミスに「黄金の葦の」という枕詞が結びつけられ、やがて「黄金の矢の」という意味で受け取られるようになったと

^{*49} Cf. e.g. IG 5 (I). 1431. 38 (i A. D.).

^{*50} その他の例や各々の都市に関する参考文献は cf. Koursoumis 216.

^{*51} その他の文献情報も含めて cf. Calame 263f. Paus. 3.2.6 (ἐν Ἀρτέμιδος ἱερῶν τὸ δὲ ἱερόν τοῦτο ἐν μεθορίῳ τῆς τε Λακωνικῆς καὶ τῆς Μεσσηνίας ἐπεποιήτο ἐν χωρίῳ καλουμένῳ Λίμναις); Paus. 3.16.7 (τὸ δὲ χωρίον τὸ ἐπονομαζόμενον Λιμναίων Ὀρθίας ἱερόν ἐστίν Ἀρτέμιδος); Strabo 8.4.9 (τὸ δ' ἐν Λίμναις τῆς Ἀρτέμιδος ἱερόν… ἀπὸ δὲ τῶν Λιμνῶν τούτων καὶ τὸ ἐν τῇ Σπάρτῃ Λιμναίων εἴρηται τῆς Ἀρτέμιδος ἱερόν).

^{*52} この神域と出土品について cf. Koursoumis esp. 195ff.

いう過程も想定しうるだろう。また、先述したように Bacchyl. 11 の例においては、単にアルテミスと当該枕詞の伝統的な結びつきだけでなく、祝勝歌の舞台となった市におけるアルテミスと川の関わりも意識された可能性がある。古典期にこの枕詞を使う際に、改めてその語源やその語が水辺とアルテミスの関連を喚起しうるということが意識化されたのかもしれない。

V まとめ

最後に本稿の議論をまとめておきたい。本稿は、*χρυσηλάκατος* の用例と先行研究を整理し、検討してきた。Due が説明したように、*ἡλακάτη* は主に「紡錘・羊毛棒」を指すにも拘らず、その材料となる葦が矢の材料でもあることから、*χρυσηλάκατος* は「黄金の紡錘・羊毛棒の」または「黄金の矢の」と理解されうる。この従来からの 2 つの解釈に加え、本稿は「黄金の葦の」という 3 つ目の解釈の可能性を提案した。

ホメロス叙事詩・賛歌 (II) では、*Od.* 4. 122 を例外として、*χρυσηλάκατος κελαδευή* という 3 脚後半以降の詩行を占める定型表現として、格を変えながらアルテミスを形容するのに繰り返し使われており、ヘーシオドスの補いもこの定型表現を拠り所とする。*ιοχέαιρα* と並んでアルテミスを形容する代表的な枕詞（エピテトン）と言ってよい。家に属する女性としての営みを象徴する「紡錘・羊毛棒」の意味を枕詞に含むことは、野山で弓を引き、未婚女性のコロスを率いるアルテミス像に相容れないため、「黄金の紡錘の」という理解は首肯しかねる。古註等に従い、*Od.* 4. 122 以外の例では、叙事詩・賛歌におけるアルテミスの枕詞は「黄金の矢の」と理解するのが妥当だろう。

ピンダロスとバッキュリデース (III) では、アルテミス以外の女神たちを矢に関連づける理由がないため、「黄金の紡錘の」と解されることが通例である。但し、具体的に糸紡ぎの道具に言及しているというよりは、装飾的な語と解されることもある。これに対し本稿は、この枕詞が用いられている女神たちの殆どは水に関わりがあることを指摘し、「黄金の葦の」という解釈の可能性を提起した。Bacchyl. 11 においても、アルテミスと川の結びつきが重要であった。

Soph. Trach. 637 (IV) がアルテミスへの言及と解される根拠の 1 つは、舞台となる土地におけるアルテミスと水辺の関わりであった。*Eur. Hipp.* の舞台となったトロイゼーンやラコーニアとメッセーナの境界地域など、アルテミスと沼地や潟、川といった水辺との結びつきはギリシア各地で確認される。このことから、アルテミスと水辺の関わりが、この女神と枕詞 *χρυσηλάκατος* の結びつきの背景にある可能性を示唆した。

本稿で検討した *χρυσηλάκατος* の解釈の可能性を箇条書きにすると以下ようになる：

- 1) 「黄金の矢の」
- 2) 「黄金の紡錘・羊毛棒の」
- 3) 「黄金の紡錘・羊毛棒の」と訳すが、装飾的使用
- 4) 「黄金の葦の」

この枕詞が冠せられる女神たちには、アルテミスからの転用と解しうるレートーを除いて、水との関わりが指摘できる。アルテミス以外の女神を形容するのに「黄金の葦の」という解釈は十分考慮に値すると思われる。アルテミスの場合も、「黄金の葦の」という意味が次第に薄れて「黄金の矢の」と理解されるようになったのかもしれないし、あるいは「黄金の葦の」という意義の残響が感じられていたかもしれない^{*53}。叙事詩や賛歌の世界を離れて、祝勝歌や悲劇において諸々の土地に根付く儀礼と切り離されえないアルテミスが謳われるとき、改めて水辺に住まう女神の姿が意識されたように思われる^{*54}。

(九州大学／国際基督教大学キリスト教と文化研究所)

参考文献

- Aura Jorro, F. (1985-93) *Diccionario Micénico*. 2 vols. Madrid.
- Barrett, W. S. (1964) *Euripides: Hippolytos*. Oxford.
- Beekes, R. (2009) *Etymological Dictionary of Greek*. 2 vols. Leiden.
- Blümner, H. (1879) *Technologie und Terminologie der Gewerbe und Künste bei Griechen und Römern*, Band 2. Leipzig.
- Bömer, F. (2016) *P. Ovidius Naso, Metamorphosen: Kommentar*, Buch I-III. 2. Auflage. Heidelberg.
- Brügger, C. (2018) *Homer's Iliad: The Basel Commentary. Book XVI*. trans. by B. W. Millis and S. Strack and edited by S. D. Olson. Berlin.
- Burkert, W. (1985) *Greek Religion*. trans. by J. Raffan. Cambridge, MA.
- Burnett, A. P. (1985) *The Art of Bacchylides*. Cambridge, MA. and London.
- Cairns, D. L. (2005) 'Myth and the *Polis* in Bacchylides' Eleventh Ode', *JHS* 125: 35-50
- Cairns, D. L. (2010) *Bacchylides: Five Epinician Odes (3, 5, 9, 11, 13); Text, Introductory Essays, and Interpretative Commentary*. Cambridge.
- Calame, C. (1977) *Les choeurs de jeunes filles en Grèce archaïque. 1. Morphologie, fonction religieuse et sociale*. Roma.

^{*53} 「黄金の葦矢の」という意味理解も想定しうる。Cf. n. 16.

^{*54} 本研究はJSPS 科研費JP23K00424の助成を受けたものである。匿名の査読者2名と編集主幹の大芝芳弘氏から大変有益なご指摘とご示唆を数多くいただいた。また、文献の情報や入手に関して、佐野好則氏、小林薫氏、河島思朗氏のご助力を得た。記して深謝する。

- Chadwick, J. & L. Baumbach (1963) 'The Mycenaean Greek Vocabulary', *Glotta* 41: 157–271.
- Chantraine, P. (1968–77). *Dictionnaire étymologique de la langue grecque. Histoire des mots*. Paris.
- Clader, L. L. (1976) *Helen: The Evolution from Divine to Heroic in Greek Epic Tradition*. Leiden.
- Davies, M. (1991) *Sophocles: Trachiniae*. Oxford.
- Diggle, J. ed. (1981–94) *Euripides Fabulae*. I–III. Oxford.
- Drachmann, A. B. ed. (1927) *Scholia vetera in Pindari carmina*, vol. 3. Leipzig.
- Due, O. S. (1965) 'The Meaning of the Homeric Formula χρυσηλάκατος κελαδewή', *Classica et Mediaevalia* 26: 1–9.
- Easterling, P. E. (1982) *Sophocles: Trachiniae*. Cambridge.
- Erbse, H. ed. (1975) *Scholia Graeca in Homeri Iliadem (scholia vetera)*, vol. 4. Berlin.
- Farnell, L. R. (1896) *The Cults of the Greek States*, vol. 2. Oxford.
- Faulkner, A. (2008) *The Homeric Hymn to Aphrodite: Introduction, Text, and Commentary*. Oxford.
- Fränkel, M. (1876) 'Weihgeschenke an Artemis Limnatis und an Kora', *Archäologische Zeitung* 34: 28–33.
- Frisk, H. (1960) *Griechisches etymologisches Wörterbuch*, Band 1. Heidelberg.
- Gerber, D. E. (1999) 'Pindar, Nemean Six: A Commentary', *HSCP* 99: 33–91.
- Hansen, P. A. & I. C. Cunningham eds. (2009) *Hesychii Alexandrini Lexicon*, vol. 4. Berlin and New York.
- Janko, R. (1992) *The Iliad: A Commentary*, vol. 4. Cambridge.
- Jebb, R. C. (1905) *Bacchylides, The Poems and Fragments*. Cambridge.
- 川島重成 (1990) 「エウリーピデース『ヒッポリュトス』訳及び訳注」『ギリシア悲劇全集 5』岩波書店 269–371.
- Kirk, G. S. (1985) *The Iliad: A Commentary*, vol. 1. Cambridge.
- Koursoumis, S. (2014) 'Revisiting Mount Taygetos: The Sanctuary of Artemis Limnatis', *The Annual of the British School at Athens* 109 (1): 191–222.
- 呉茂一訳 (1971) 『ホメロス：オデュッセイアー (上)』岩波文庫。
- 呉茂一訳 (2003) 『ホメロス：イーリアス下』平凡社ライブラリー (岩波文庫版 1953–58、改版 1964 の復刻)。
- Larson, J. (2001) *Greek Nymphs: Myth, Cult, Lore*. Oxford.
- Latte, K. ed. (1966) *Hesychii Alexandrini Lexicon*, vol. 2. Copenhagen.
- Leaf, W. (1900–1902) *The Iliad*, 2nd edition. 2 vols. London.
- Leeuwen, J. van (1912–3) *Ilias: cum prolegomenis, notis criticis, commentariis exegeticis*. Leiden.
- Maehler, H. (1982) *Die Lieder des Bakchylides. I Die Siegeslieder*. 2 vols. Leiden.
- Maehler, H. ed. (1989) *Pindari carmina cum fragmentis*, pars II. Leipzig.
- Maehler, H. ed. (2003) *Bacchylides: carmina cum fragmentis*, 11th edition. Leipzig.
- Maehler, H. (2004) *Bacchylides: A Selection*. Cambridge.
- 松平千秋訳 (1992) 『ホメロス：イーリアス (下)』岩波文庫。
- 松平千秋訳 (1994) 『ホメロス：オデュッセイアー (上)』岩波文庫。
- Meier, W. D. (1976) *Die epische Formel im pseudohesiodischen Frauenkatalog: eine Untersuchung zum nachhomerischen Formelgebrauch*. Diss. Zürich.
- Merkelbach, R. & M. L. West eds. (1967) *Fragmenta Hesiodica*. Oxford.

- 中務哲郎訳 (2022) 『ホメロス：オデュッセイア』(西洋古典叢書) 京都大学学術出版会.
- Nilsson, M. P. (1967) *Geschichte der griechischen Religion*, vol. 1. München.
- 小川洋子訳 (2015) 『テオプラストス：植物誌 2』(西洋古典叢書) 京都大学学術出版会.
- Olson, S. D. (2012) *The Homeric Hymn to Aphrodite and Related Texts: Text, Translation and Commentary*. Berlin.
- Papageorgius, P. N. ed. (1888) *Scholia in Sophoclis tragoedias vetera*. Leipzig.
- Radt, S. ed. (1985) *Tragicorum Graecorum fragmenta*, vol. 3. Göttingen.
- Roscher, W. H. (1884–86) *Ausführliches Lexikon der griechischen und römischen Mythologie*. Leipzig.
- Seaford, R. (1988) ‘The Eleventh Ode of Bacchylides: Hera, Artemis, and the Absence of Dionysos’, *JHS* 108: 118–36.
- Segal, C. (1998) ‘Bacchylides Reconsidered: Epithets and the Dynamics of Lyric Narrative’, in *Aglaia: The Poetry of Alcman, Sappho, Pindar, Bacchylides, and Corinna*. Lanham, MD. 251–80 (orig. (1976) *QUCC* 22: 99–130.)
- Smyth, H. W. (1900) *Greek Melic Poets*. London.
- Snell, B. & H. Maehler eds. (1987) *Pindari carmina cum fragmentis*, 8th edition, pars I. Leipzig.
- Solmsen, F. (1909) *Beiträge zur griechischen Wortforschung*, Teil 1. Strassburg.
- Stanford, W. B. (1959) *Homer: Odyssey I–XII*. London.
- Stern, J. (1965) ‘Bestial Imagery in Bacchylides’ *Ode 11*’, *GRBS* 6: 275–82.
- Stupperich, R. & C. Stupperich (2022) ‘Economy and the Persian Wars – the Case of Troizen’, in *Coastal Geoarchaeology in the Mediterranean – on the Interdependence of Landscape Dynamics, Harbour Installations and Economic Prosperity in the Littoral Realm*. M. Engel et al. eds. Heidelberg. 27–43.
- 丹下和彦訳 (2002) 『アルクマン他 ギリシア合唱抒情詩集』(西洋古典叢書) 京都大学学術出版会.
- Thiel, H. van ed. (2014) *Scholia D in Iliadem. Proecdosis aucta et correctior 2014*. Köln.
- 内田次信訳 (2001) 『ピンダロス 祝勝歌集／断片選』(西洋古典叢書) 京都大学学術出版会.
- Vernant, J.-P. (1991) *Mortals and Immortals: Collected Essays*. F. I. Zeitlin ed. Princeton.
- West, M. L. ed. (1998–2000) *Homerus Ilias*. 2 vols. Stuttgart und Leipzig.
- West, M. L. ed. (2017) *Homerus Odyssea*. Berlin.
- West, S. (1988) ‘Books I–IV’, in *A Commentary on Homer’s Odyssey*, vol. 1. Heubeck et al. eds. Oxford. 49–245.
- Wickert-Micknat, G. (1982) *Die Frau*. (*Archaeologia Homerica*, Band III, Kapitel R.) Göttingen.
- Willcock, M. M. (1984) *Homer, Iliad*, vol. 2. London.
- Willcock, M. M. (1995) *Pindar: Victory Odes, Olympians 2, 7, 11; Nemean 4; Isthmians 3, 4, 7*. Cambridge.

On χρυσηλάκατος: an Epithet for Artemis and Goddesses of Water

Hiromi HAMAMOTO

This study delves into the intricate epithet χρυσηλάκατος associated with Artemis and other water goddesses, examining examples in Homer, Pindar, Bacchylides, and Sophocles and scholarly interpretations of them. Drawing upon the original meaning of the latter part ἡλακάτη, which conveys the notion of ‘reed’, a material frequently employed in the crafting of both arrows and distaffs, the traditional interpretation of the epithet typically denotes ‘with golden arrows’ specifically for Artemis, with exceptions noted in *Od.* 4. 122 and Bacchyl. 11. 38, and ‘with golden distaff’ for other goddesses. In addition to these two senses, this research proposes an alternative interpretation, ‘with golden reed’.

In Homer, χρυσηλάκατος is exclusively used for Artemis (*Il.* 16. 183; 20. 70; *Od.* 4. 122; *h.Hom.* 27. 1; *h.Hom.* 5. 16, 118). While some scholars support the interpretation of ‘with golden distaff’, the prevailing argument favors the understanding of ‘with golden arrows’ in alignment with Hesychius and the scholia on Homer. This viewpoint is consistent with Artemis’ untamed nature and her association with initiation and choral rituals rather than domesticity. In Hesiod’s fragment 23 (a) 18 (M-W), moreover, the epithet is restored based on its established formulaic usage.

Pindar and Bacchylides in contrast employ the epithet χρυσηλάκατος for other goddesses such as Amphitrite (Pind. *Ol.* 6. 104), the Nereids (*Nem.* 5. 36), Melia (*fr.* 29. 1 (S-M)), Leto (*Nem.* 6. 36; *fr.* 128c (S-M)), and the Charites (Bacchyl. 9. 1) as well as Artemis (11. 38). In these cases, the interpretation of ‘with golden distaff’ is generally preferred, although some scholars view it as purely ornamental. However, an alternative understanding of ‘with golden reed’ is worth considering particularly for the first three usages, as these goddesses are associated with bodies of water where reeds commonly grow. The epithet for Leto can be explained as transferred from Artemis, while the association of the Charites and the Muses with springs and rivers further supports this alternative interpretation. Moreover, Bacchylides’ 11th ode, performed in Metapontion in South Italy where Artemis was worshipped near a river, encourages detecting the connection between Artemis and water behind the epithet.

Sophocles’ *Trachiniae* 637 is generally interpreted as a reference to Artemis due to the epic usage of the epithet and the presence of the Malian Gulf. Artemis’ widespread association with wetlands, springs, rivers, and swamps in various locations such as Troizen (the location for Euripides’ *Hippoly-*

英文要旨／Summary

tus), Sicyon, Tegea, and the border area between Laconia and Messena strengthens the suggestion for discerning Artemis' connection with water behind her traditional epithet χρυσηλάκατος.

Thus, this study offers a nuanced perspective on the epithet χρυσηλάκατος, proposing an alternative interpretation as 'with golden reed'. This alternative understanding is informed by the association of Artemis and other goddesses with water, adding depth to the understanding of this intriguing epithet.